

\*

雨が降っている。

病院からこの河原まではそこまで長くなかったように感じる。何も考えていなかったからかもしれない。ただ、足の赴くままに——そうして、ここに辿り着いたのだ。

傘も差さずに死人のように歩く僕を見て、通る人はきつとたいそう気味の悪いものを見たと思っただろう。死人のよう——。僕が本当に死人だったとしたら、差し詰めここは賽の河原だ。いっそのこと僕も、渡れるものなら渡つてやろうか。そう思ってみたところで、医者に死亡診断書という名の六文銭を貰えるわけではないことは、当然分かっている。

日はとうに暮れてたいした光がないから川は黒いが、堤防に立てられた小さな電灯が、空から無数に落ちる雨を、線状に浮き上がらせる。濡れる背中に身震いをする、川の音か、いやきつと雨の音だろう、ごうごうという音が聞こえてきた。

鈴虫も鳴いていない。ただ雨の音と、そう強くはない風の音、そして心臓の音、お前は生きているんだぞとお節介にも叫び続ける音がした。

僕はなぜ病院を飛び出したのだろう。どうせ戻らなければならぬのに。

それはきつと雨だからだ。雨さえあれば全身濡れて、赤く腫れた眼元を、きつと誰も気にしない。

僕はなぜ河原に来たのだろう。普段来るようなところでもないのに。

それはきつと広いからだ。ここならどれだけ叫んでも誰の耳にも届かない。

川の唸りも篠突く雨も、この不幸への天の深い慟哭なのだと思えるほどの詩情は僕にない。人の心などお構いなしに、雨はただ降っている。

ねえ、何してるの。

ふと声が出たような気がして横をちらと見る。当然誰もいない。誰もいないが、今ではないいつかの瞬間、こんなふうに近い位置からよく発せられた一つの声を、あるときはレストランで机越しに、あるときは疾走するジェットコースターに悲鳴として、またあるときは軋むベツドの上に、聞いた。その声は既に止み、もう新たな声色を聞くことはない。こんなとき君は何を言っただろう、そう考えて答えを出しても、ただの僕の推測である以上ただの僕の言葉だ。

雨は降る。肩を打つ。背を走る。

天を仰いでも、当然止まない。当分止まない。

耐えきれなくて、橋の下に身を隠す。

へたりこむように座る。

雲を見る。ただ灰色だった。

\*

嫌な雨だ。

私は今夜家に帰れない。膨大な資料と睨めっこしないといけないからだ。でもそれは別に嫌じゃない。久しぶりの大仕事に高揚感すら覚える。私立探偵の看板をかけてもう五年になり、警官の知り合いが増えた。その結果彼らの仕事のうち、たいして重要ではないが必要な調査や資料精査に駆り出されるようになった。要するに外注というわけで、今回私が眠れないのもそのクチだ。

資料を漁るといのはどうにも孤独な仕事だ。助手も返してしまつたからいよいよ一人だ。孤独は慣れるものだが、孤独がもたらす静けさだけはどうも慣れない。時折、ペラと紙をめくる音のする以外、全ての音は外からだった。嫌に耳に残る雨の音。夜の雨はいつも陰鬱だ。

そういえば、と思わず顔を上げ、窓の向こう、雨にける街の方を見やった。夜の雨というと、どうにも駆け出しのころを思い出す。

思えばあれはまだ数件目の仕事と言つたところで、今よりも一軒一軒の依頼に、あるいは依頼を貰うこと自体に喜びを抱いていたころだった。男が、人を探してほしいという。今思えば、まずはなにより警察に届け出ましようと言ふべき案件だったが、そのころの私はまだ駆け出しで、正義と信念のもと何だつてできると信じていたから、ほいほいと受け取つたのをよく覚えている。

探してほしいと言われたのは、どうやら依頼人の交際相手の女らしかった。同棲はしていなかつたものの前々

から結婚の話をしており、失踪に至る時点で大きな喧嘩を引きずつている事もなく、ただ男の前から姿を消したという。旅行好きでふらりとどこかに行つてはお土産を持つて帰つてくるような性格だから、突然に連絡が途絶えることそのものは初めてではないというが、いくら何でも長すぎるのだという。焦つているのは明白で、ちゃんと愛している男なのだと思つた。

調査は、私の手際の悪さもあつて難航した。行方不明の女は旅好きであることは、同じく山歩きを趣味とする——つまり今では山ガールと呼ばれるような——女の妹も証言していた。姉妹はお互いに思い立つた時に山に行くからどこに行つてくるみたいな報告はしないらしかつたが、近いうちに行きたいと言つていた山があつたことと、何よりも恋人思いの良き彼氏をほつたらかして何日も姿を現さないというのは姉とはいえないかなものか、逆に言えばそんなことをする人ではないと言つていた。

私は今も昔も山ガールではないから山登りは断じてしたくなかつたが、まあ麓の町まで聞き込みをするべきだろうとその週の末に泊りがけで現地に行く用意をした。が、それは徒労に終わった。出発の前日、その山のハイキングコースから離れた崖下で、滑落したと思しき女性の遺体が見つかったからだ。崖の上にはテントの跡も見つかり、遺品によつて身元確認をされたその遺体は、もうお分かりだろう、依頼人の恋人だった。

何日か前から天気が悪く、テントで寝るには心地の悪い強めの雨が降っていたらしい。土も荒れてぬかるみ、靴がずり落ちた跡がどれかも分からないような有様だった。

遺体の搬送された病院には私も行つた。行つたところ遺体に会えるわけでもなかつたが、妹さんに呼び出されたのだ。その理由は明らかだった。依頼人の監視である。遺体が見られないという事は、正気を保つていられるという事だ。正気の間人だけが狂気の間人を止められないの。その予想は的中し、依頼人の男は思考回路があるのかないのか分からない素早いゾンビみたいな動き方で病院を抜け出そうとした。当然止めようとしたが、

雨が降つていたのだ。

きっと恋人が死んだ時のように。地面を容赦なくぬかるませるような雨が、夜の街に降つていたのだ。彼は、恋人を奪つたこの雨に何を思うのだろう。崖下で命尽きるまで雨に打たれていた恋人と、同じ辛みを知りたかつたのかも知れない。そう思うと、止めることはできず、ただ後ろからついていくことしかできなかった。河川敷で泣き叫ぶ依頼人を、初めて聞く成人男性の魂の慟哭を、私は一生忘れることは無いだろう。

後日、依頼人が私の事務所に来た。私は何も力になれなかつたことを謝罪したが、彼もようやく現実と向き合うことに決心がつき始めたらしく、恋人の妹さんに支えられて、また前を向き始めたようだ。

恋人の趣味を継ぐことにしたらしい。彼は全くキャンピングに興味がなかつたらしいが、妹とともに、初心者ながら試行錯誤しあつて恋人の追体験をしているようだった。

おや。

何か、嫌な引つ掛かりを感じた気がする。何かが違う。

記憶違いか、それとも本当に何かがおかしいのか、思い出せるような気がする――が、

雷鳴。

はっと我に返ったように、思考が一新される。資料を見る目が止まっていたことに気付き、首を振ってまたペー  
ジをペらとめくっていく。もちろんあの後あの男とは会  
っていない。一期一会の仕事だからこれからも無いだろ  
う。だがそれでも、今頃どうしているのだろう、願わく  
はあの男に幸多かれ、と、静かに心で祈った。

雨が降る。

これじゃあ明日のハイキングは駄目そうね、とママが  
言った。もう夜の八時くらいで、もう眠かった。この強  
さの雨が一晚じゆう続いたら、山道も原っぱもぐちよぐ  
ちよだ。明日はおうちでおままじことになった。

パパは雨の夜は大抵泣きそうな顔をして部屋に引きこ  
もる。ねえ、何してるの、と言っても、あたしのことな  
んかどうでもいいと言うように、部屋の鍵をガチャリと  
占める。ママはそれを止めない。パパは雨の日の夜に嫌  
な思い出があるのよ、とだけ言う。

あたしもこんな雨の音を聞いて寝るのは嫌いだ。どう  
してか分からないけど、決まって悪い夢を見るからだ。  
大人になったあたしが、ママに崖から突き落とされる  
夢。強い雨の中、ぬかるんだ土の上、鬼のような表情で、  
あんたは邪魔だと、そう叫ぶ夢を。